

育児休業の誤解

小西正人

新聞記者

育児休業を取った、しかも2回、といういろいろな誤解されて困る。

いい意味でも悪い意味でも、すごく大変で特別なことのように言われるのだが、育児休業を取ること自体は、何も大変ではない。男が子育てするのも、2人の子だから当然だと思う。

少なくとも僕が初めて取得した1993年春には、すでに育児休業法が施行されており、会社にも育児休業規則があった。規則に則って申請を出せば、後は肅々と手続きが進むだけ。だれも表立って横やりをいれたりできない。

僕の場合もその過程では何もトラブルはなかった。だから、もっと男性が育児をとってもいいのと思う。取らないほうが不思議だ。

しかし実際には、休むのはやはり「大変」なんだろう。多くの職場が

そうだろうが、限られた人数で仕事をこなしている以上、育児で休んでも人員が補充されなければ、同僚の仕事量を増やすことになる。これは、僕もやはり申し訳ないと感じた。多くの男性が取りたくても取れないのは、このせいかもしれない。

でも考えてみるとそう感じるのも変だ。規則があるのだから、休業者が出た場合の職場への影響をできるだけ少なくする責任があるのは、休みを取った本人ではなく会社のほうだ。

実際に休みに入ってからはどうかという
と、女性が「当たり前のように」やっているのと同じことをやるだけだ。不慣れという面はあるが、初めての子

なら女性も慣れているわけじゃないから、やはり特別のことじゃない。

実は初めての育休の時は、いくつか取材を受けて「育児をしてみてわかったこと」を得々と話したものだ。でも、心の片隅で罪悪感のようなものも感じていた。というのは僕が取得した育休は1回目は2か月、2回目は1か月だ。

育児の一番苦しい部分は、言葉も満足に通じない動物(赤ん坊)に24時間拘束される期間が数年

間にわたって続く、という「いつ果てるともしれない継続性」だろう。が、2か月後に職場復帰した僕は、その継続性からは逃れられた。

いくら帰宅後や休日にオムツを替えたり、ミルクをやったりしても、「ずーっと続く」という感覚に苦しめられることはない。職場復帰後、妻は2人で分担していた育児を1人

で背負い、よけいしんどい思いをしていた。楽をしている僕が「男だから」という理由で特別扱いされてはすまない。

「2か月の育休で、子育てしたみたいと言わないでほしい」と言ってくれたのは、取材で知り合った後、家族ぐるみでのつきあいのあった女性だ。こういう女性こそ信用できる。

これからは、育休を自慢気に話す男性には注意したほうがいい。本当に、大変でも特別でもないのだから。

では、育休を取ってよかったか悪かったか。それは2回目を取ったことで判断してほしい。

